

ラブレール研究の展望とその人文主義の意義

石 橋 正 孝

序論

2019年4月15日、パリの観光名所であるノートルダム大聖堂で火災が起き、世界中でニュースとなったことは記憶に新しいが、その再建工事の過程で二つの棺が発見され、その身元調査の結果が2024年9月17日に発表された。二つの棺のうちの一つは、16世紀のフランス・プレイアッド派の代表的詩人の一人であるジョアキム・デュ・ベレーのものであることが確認された¹。棺の中の遺体がデュ・ベレー本人であると結論づける決め手の一つとして、長期間の騎乗が骨格にもたらす変形も確認された。

16世紀文学の研究は、16世紀学者 (seizièmiste) という呼称を持つことで、歴史研究・文学研究の区分が明確ではないことを示しているが、デュ・ベレーの棺と遺体の発見が示すように、考古学的・人類学的な発見が文学史に寄与する余地が未だ残されている領域でもある。

一方で、他の隣接領域との上記のような連携を除いた「文学研究」についていえば、フランスでは120年を超える歴史を持つようになり、16世紀の「書かれたもの」を扱う歴史・文学を対象とする研究は飽和状態を迎えた領域も出てきたように思われる²。

この現在のフランス文学、ひいてはフランスの近代学問成立の背景には、フンボルト理念³がある。19世紀初頭のナポレオンのヨーロッパ制圧に対して、

啓蒙の世紀の成果としての科学でフランスに敗北したと認識したドイツでは、科学の立て直しが求められ、フンボルト理念に基づいて1807年にベルリン大学が設立される。ついで因果応報のように、1871年の普仏戦争敗北によって科学的後進性を認めたフランスは、ドイツに習った大学制度の抜本的改革に着手し、第三共和政の19世紀末に各学区に一大学の現在に至る制度的大枠が作られた。

こうして、現在のフランス文学研究の歴史が始まるわけだが、それは近代大学制度の整備と同時に創られた人文諸科学の一つとしての文学であり、作品としての文学と区別しなければならない。フランスで近代の大学制度が整うのは、19世紀末であり、現在大学で「文学」として成立している学問もこの時に誕生しており、学問としては新しいのだ⁴。

神学部を中心とするパリ大学が1215年創設以来8世紀の歴史を持つことを考えると、学問としては日が浅い。この事実は、文学研究者が自ら信じるその存立基盤の普遍性に対する試練である。『イリアス』、『オデュッセイア』を西洋文学の始まりとすれば、「作品としての文学」のおよそ2700年⁵の歴史に対して、それらを「研究する学問としての文学」があたかも同等の普遍性を獲得しているという錯覚に甘んじていてはならないのだ。それは、個々の研究に対しての戒めではなく、より根源的なところで、近代学問としての文学が、帝国主義的イデオロギーに端を発する近代の一過性の現象に過ぎないのではないか、その役割も終焉を迎えているのではないかという危機意識である。

本稿においては、こうした近代人文科学の一領域としての文学の飽和・閉塞状況の中で、16世紀のフランスを代表するフランソワ・ラブレーについて120年の研究を簡単に振り返り、その作品の意義について改めて考え、とりわけその人文主義に焦点を当てて文学研究としての今後に向けての方向性を探っていく。

ラブレー研究の現状

ラブレー研究は、1903年の *Etudes Rabelaisiennes* の刊行から現在まで⁶、120年の歴史を有している。ラブレー研究誌の発刊が、すでに述べた近代の職

業的文学研究の出発と同時であったことが、ラブレールのフランス文学史上に占める重要性を示しているといえよう。

一方で、ラブレール研究の現状は徐々に閉塞的な状況を迎えている。120年に渡って多くの職業研究者によって知見が積み重ねられてきたので、新しい知見を付け加えていくのはいよいよ困難になってきたのである。また、裏を返せば、新たな研究者志望が作家ラブレールを研究しようとする、この120年分の知見をまず身につけてからでなければ学問的なスタート地点に立つことが難しいという、きわめて敷居の高い研究対象となってしまうことを意味する。

この現状に至るまでの研究の歴史をここで簡単に概観する。まず、*Etudes rabelaisiennes* の創刊の当初は、実証研究とあわせて校訂版の作成が真っ先に取り組みされた事業であり、A. ルフランらが1913年から1931年にかけてその後のラブレール研究の土台を築いた⁷。第二次大戦前後には構造主義の流行がルネサンス研究にも波及してくる。ロシア・フォルマリズムの流れを汲む M. バフチン⁸の著作がフランス語に翻訳されると、作品中の民衆文化の役割を重視する構造主義的なアプローチが盛んとなり、同時に M. スクリーチに代表される⁹人文主義研究の陣営もフランスにおけるラブレール研究の正統派として着実に成果を重ねてきた。

実際、1990年くらいまでは、バフチン派か、スクリーチ派かの二択のような状況になっていたが、同時に、文学の世界における構造主義の流行は、ラブレールの作品において民衆文化の社会的力学を読み取るのみならず記号論的アプローチをとる研究も多く見られるようになってきた¹⁰。しかしながら、1980～90年の時点ですでに研究の蓄積は膨大なものとなり、新たな研究者が研究対象とすることを忌避する傾向が出始めた。

その傾向を裏付けるように、それまでは傍流として放置された状態にあったラブレール以外の同時代の散文作品への研究が、一つの大きな波となる。70年代には、ラブレール以外の同時代の散文物語に関しては「その他」扱いであった¹¹が、ラフンソワ I 世の姉であるマルグリット・ドゥ・ナヴァールに関しては、すでに研究は進んでいたが、ボナヴァンチュール・デ・ペリエ、ニコラ・

ドゥ・トロワ、エリゼンヌ・ドゥ・クレヌなどが90年代に入って注目を浴びるようになり¹²、16世紀前半という印刷術の普及が進んだ時代の、物語の在り方についての研究¹³が進んだ。

こうして研究対象がラブレーから外れて「傍流」への研究に研究者の意識が向かうようになるのと同時期に、20世紀前半の校訂版以来のラブレー研究の集大成ともなる M. ユションの校訂版が1994年に出版される¹⁴が、この辺りからいよいよラブレー研究は転換点を迎えるようになってくる。研究書の出版が減り、代わりに大衆向け入門書、バカロレアの試験対策書、現代語訳などが目立って増えてくるようになる。

フランスでは、M. ユションが2011年にラブレーの概説書¹⁵を出版し、時期を同じくして日本では2009年に、イギリスで2010年、アメリカでは2011年にそれぞれラブレーに関する基本書が刊行された。アメリカのもの¹⁶は、教師が共有するためのラブレー指南書であり、イギリスのもの¹⁷はより読者層を広げてラブレーの概説書となっている。いずれも、両者がその主旨を明確にしているように、ラブレーに関する新しい発見を意欲的に探るというものではない。教員間でのラブレーの価値の情報共有、または一般向けの読み物としてラブレーを親しみやすくするためのものである。また上述の *Études rabelaisiennes* の最新号も、イギリス人によるラブレーの作品の初版から17世紀初頭までの版の整理と補足であり、今からラブレー研究に着手するフランス人の研究者も見当たらず、いよいよラブレー研究に関しては一段落という流れになっている¹⁸。

破壊者ラブレー

ここで、『ガルガンチュア』第11章の「ガルガンチュアの幼年時代」の冒頭を引用し、ラブレーの破壊者としての要素を紹介する。

「ガルガンチュワが三歳から五歳になるまでは、父親の命令通りに、あらゆる適切なしつけによって育てられ、国の幼い子供たちと同じように過ごすことになった。つまり、飲んだり、食べたり、眠ったり、食べたり、眠ったり、飲んだり、眠ったり、飲んだり、食べたりしていたのである。毎日のように泥水の中を転げまわった

り、鼻面を真っ黒にしたり、顔を汚したり、靴の踵を潰したり、蠅を相手にあくびを連発したり、喜んで蝶を追いかけていたりしていたが、ところで蝶と言えば、父君グラングウジェは蝶々国を支配していたのである。ガルガンチュワは、自分の靴におしっこをひっかけたり、肌着のなかへうんこをしたり、袖で鼻をかんだり、スーブのなかへ洩を垂らしたり、ところかまわずに泥んこになって転げまわったり、上靴で酒を飲んでみたり、いつも籠の胴腹へ体を擦り付けたりしていた¹⁹。」

この引用は、ガルガンチュワが幼年時代をいかに過ごしたかを展開していくものである。文学的評価としては中世騎士道物語のパロディーとして理解されている。騎士道物語における主人公の成長過程・幼年時代の描写を、巨人の破天荒なそれに置き換えた笑いとしての評価だが、このガルガンチュワの幼年時代から読み取れるのはそれだけではない。

中世騎士道物語のパロディーとしての幼年期であれば、騎士の比類なき才能の片鱗を示すエピソードの代わりに「飲んだり、食べたり、寝たりして過ごした」といって完結するはずが、そこで終わらず、記号の自己増殖が始まる。この引用部分の3倍以上に及ぶ描写が読者を圧倒する勢いで洪水のように続いていく。この三つの語順を入れ替えるところから始まり、延々と続く描写の洪水は、要約という合理性を拒絶する記号の物質性・物量そのものによって物語のレトリックの破壊と記号の自己増殖という、フランス文学史上唯一ともいうべきラブレールの筆致の特徴となっている。この記号の自己増殖はラブレールの作品のいたるところで見られるが、近代フランス語の生成期において、世界の事物のすべてを言語化しようとするかのごとき試みは、本稿の後半で言及するラブレールの「フランス語の創造者」としての意義となっている。

しかし、この記号の列挙のなかでより重要な点として、とりわけ身体描写の延々と続く羅列から読み手が体験することは、レトリック・理性から記号を解放して、記号そのものの直接的かつ原始的な体験であり、その原始性の中で共有される人間の物質・肉性である²⁰。ガルガンチュワのこの引用に描かれているのは、物質・肉としての生命の、原始的な生きる喜びそのものであり、理性

的な拘束からの解放なのだ。

そしてこれは M. バフチンが指摘するグロテスク・リアリズム²¹そのものである。すなわち、人の理性的なものが、人の「物質としての肉性」から離れていくほどに、人間の本質から離れたものとなっていくのであり、肉としての人のグロテスク・リアリズムには、その形骸化した理性を破壊し、人間性の原点に還元することで、新たな理性を生み出す契機とするのである。

中世までの理性を代表するキリスト教という制度は、中世にわたる長期支配により疲弊・形骸化した結果、その生みの大地であるはずの民衆文化を制度として抑圧して久しい時代であった。キリスト教も本来は民衆の苦しい現世からの救済願望を満たし、現実と死への恐怖に対する癒しを与えるものであったが、その教えが権威となり形骸化すると、本来の意義を失い制度存続自体が目的となり、教義に内包される現世否定の志向は、民衆の生きる喜びを抑圧するものとなってしまった。

すると、こうした文化制度を生み出す土壌としての役割を持つ民衆文化は、それを土に還す機能を発動させることになる。役目を終えて形骸化・硬直化した制度を再びその土壌に還元するために、権威的制度が人間性から逸脱した理性的な部分、すなわち物質性・肉性の否定に対して、糞尿も含めた人間の肉性・物質性をぶつけることで、権威の貶め、奪冠を行う。それがカーニヴァルの原点であり、民衆文化の発揚の場であり、ラブレーがその文学的象徴とされているグロテスク・リアリズムである。ラブレーの作品においては、そのグロテスク・リアリズムが高らかな巨人の笑いに昇華されることで、人間性を抑圧する制度・秩序が破壊され、人間性の明るい解放が実現するのである。

本論

このように、ラブレーの文学的特徴としての記号増殖とグロテスク・リアリズムには、合理的理性へのアンチ・テーゼという共通項で、既成秩序への破壊者の要素を色濃く見て取ることができる。同時に、すでにラブレー研究の概観

で見たように、ラブレールに与えられる一番多い形容詞は、人文主義である。世間一般にラブレールの名前が知れわたっているのは、巨人、大食漢、スカトロジー、グルメというイメージであり、研究者とは受け取られる部分が異なる。

人文主義者としてのラブレールというのは、上記の肉体言語の自己増殖による秩序破壊という要素とは相反するものに見受けられるが、実は、この人文主義も「破壊者」の役割を担った歴史的イデオロギーである。本稿では、ラブレールの作品の属性として最も重要な要素ともいえるこの人文主義に焦点を当てる。その成立から発展の経緯を当時の政治・社会・宗教の激動の中でラブレールの時代背景に組み込んで考察し、今後のラブレール研究の可能性について考察する。

フランス人文主義の成立

イタリア人文主義

人文主義の発祥は、フランスではなくイタリアである。すでにその事実が人文主義の本質に強くかかわってくる。ユマニストの始祖²²と言われるペトラルカが生きた13世紀は、次のクワトロチェントと呼ばれるイタリア・ルネサンスを準備した時代である。アヴィニョン捕囚に続く教会大分裂でローマ教会の権威が失墜し、教会権力と各国の王権との覇権争いが徐々に王権に優位に動き、西ヨーロッパにおいて後の中央集権国家の原型となる封建国家が形を整えつつある時代であった。

しかしながらその西ヨーロッパの近代を形づくる大きな動きが数世紀にわたって緩やかに進行していく中で、イタリアだけは都市国家群に分裂したまま、国家としての政治的同一性はその展望すら見えない状況であった。こうしたイタリアの政治的・宗教的凋落を嘆いた愛国者として、過去の栄光を取り戻すことを夢見たペトラルカが、古代ローマの文献に傾倒していったのは自然であった。アヴィニョン捕囚によって教皇クレメンス5世がローマからフランス・アヴィニョンに移ると、ペトラルカも教皇酢に従って南仏を拠点とした。古代ローマの栄光に傾倒したペトラルカにとって、ポン・デュ・ガールやニームのアリーナなど、南仏の随所に見られる古代ローマの雄大な遺跡群に囲まれて過

ごしたことは、反ガリア（＝反フランス）の感情が育まれたとしても、それは必然であったといえるかもしれない²³。

近代ヨーロッパのアイデンティティ・近代フランスの成立

一方のフランスでは、人文主義の動きはイタリアのそれとは大きく異なる。そもそもイタリアのクワトロチェントに対してフランス・ルネサンス自体が1世紀遅れた動きであった。ここで、ラブレーの人文主義の置かれた状況を理解するために、フランス・ルネサンスについて概観していく。それは国内平和と中央集権国家の成立、対外戦争の時代である。

一般的には、フランソワ I 世の治世からその息子アンリ 2 世の治世までの、1515年から1549年までを指すことが受け入れられているが、人文主義の運動をルネサンスの契機とするならば、1470年代をフランス・ルネサンスの始点とする考え方もある²⁴。いずれも、その終点としては、国内で宗教戦争が本格化し、社会全体が暗い空気に包まれた1560年代には文芸復興運動としてのルネサンスは終わりを迎えたと考える点では一致している。

この二つの始点の解釈が分かれることも含め、この時代を準備したルネサンス以前の動きについての理解がなければ、政治・経済・文化・思想のすべてが入り組んで一斉に地殻変動を起こす時代と、ラブレーを含めてその時代の文学作品を正確に理解することはできない。

中世の西ヨーロッパは、十字軍運動に見られるように、西ローマ帝国から受け継ぐキリスト教に基づく同一性を「ヨーロッパというアイデンティティ²⁵」としていた。そもそも、同一性の意識は、対外的な危機意識、対抗意識から生まれるものであり、外圧が契機となって促進されるが、中世においては北アフリカと西アジアの東西からヨーロッパを挟むイスラム教の圧力がその生成を促進し、15世紀半ばにおいては、東はオスマン・トルコ、西はナスル朝に対抗する形で、イスラム教という異文明に対抗する地理的・宗教的基盤が同一性を保証していた。

しかしながら、そのキリスト教アイデンティティは、14世紀にペトラルカが

目の当たりにしたアヴィニョン捕囚以来大きく揺らいでいたが、レコンキスタと新大陸発見を契機として変容していくことになる。そのいずれもの主役であるスペインは、1479年のカスティーリャとアラゴンの合併後、わずか13年でイスラム勢力をイベリア半島から駆逐し、同1492年にコロンブスを援助し新大陸を発見するなど、キリスト教的同一性の地理的要因としての東西からのイスラムの脅威という図式を崩壊させ、一気に世界の覇権への道を歩み始める。ここで、16世紀初期におけるスペインのヨーロッパにおける軍事的優位性の原因として挙げられるのが、イベリア半島でウマイヤ朝・ナスル朝という異なる戦略・戦術を持つイスラム文明との長い闘いの過程で、敵への対応で変容・進化した軍事戦術の近代化であり、常に新しい戦術ユニットとその運用を積極的に受け入れる土壌ができていた点である。

一方のフランスは、イギリスとの100年戦争を通じて初めてフランスというアイデンティティが芽生えてきたが、当時まだ国家として統一されたものではなく、対イギリスでのフランスという、外圧に対するものとして騎士軍団という戦術ユニットの誇りがアイデンティティの中核をなしていた。しかしこの100年戦争が1453年に終結すると²⁶、戦争で疲弊した封建領主の弱体化に乗じて、フランス王権は40年をかけて徐々に国家の統一を進めていく。それまでは、パリを中心とした封建領主の一人として、フランス全土への実権を持たなかったヴァロワ朝は、ルイ11世がオルレアンやブルゴーニュなど抵抗する封建領主を着々と制定し、1488年にブルゴーニュを制圧して国内統一を事実上完成させる。次いで1491年にシャルル8世は最後に残った封土であるブルターニュのアンヌと結婚することでブルターニュを併合し、ここにフランス国家が完成する。

しかしながら、すでに見たように、フランスがようやく国内統一を果たした時には、すでにスペインが一足早くレコンキスタを完成する過程で軍事革命を成し遂げ、さらに新大陸を発見し、世界制覇への足掛かりを築いていた。

イタリア戦争

それを隣国として目の当たりにしていたフランスは、国内の安定を確保する

とその2年後の1494年にはイタリアに侵攻するほどに、スペインに対する自国の出遅れに焦っていたのである。無論、イタリアへの侵攻は隣国スペイン伸張への焦りだけの軽率なものではない。1492年から現代に至るまで続くフランスの一貫した戦略は、地政学的な核心的利益として第一の都市パリ、第二の都市リヨンの防衛である。そのために、この二都市からいかに国境を遠ざけるかが対外戦略の基本²⁷となっており、その戦略上の要衝リヨンからの国境線拡張がイタリア戦争の根本的な動機であった。

こうした地政学的要因を理由として、表向きは王位継承権を理由にシャルル8世がイタリア北部に侵入することになる。そこでフランス軍がローマ教皇とスイス傭兵部隊との戦いで同時に対峙することになるのは、イタリア都市国家の背後にいるスペインであった。とりわけ1516年になると、前年の1515年に王位に就いたフランソワ1世の宿敵として16世紀前半の西ヨーロッパの政治地図を描くことになるカールI世がスペイン王となり、続けて3年後の1519年には神聖ローマ帝国皇帝の位も継承して一気にフランスを東西から挟む形となり、フランスにとっては大きな脅威となる。

スペインのレコンキスタと新大陸発見が、ヨーロッパのアイデンティティの根源であるキリスト教的同一性を揺るがす契機となったことはすでに指摘したが、このキリスト教的同一性自体が、スペイン・神聖ローマ帝国の脅威を前にしたフランソワ1世の政治決断によって決定的に崩壊することになる。軍事的に進んでいた神聖ローマ帝国に1525年にパヴィアで壊滅的な敗北を喫したフランス軍は、10年後の1535年にオスマン帝国と同盟を結ぶのである。1453年にヨーロッパキリスト教共同体の片割れである東ローマ帝国を滅ぼした宿敵であるオスマン・トルコとの同盟は、イスラムという異教徒に対して、キリスト教共同体がヨーロッパのアイデンティティとして機能しなくなったことを意味する。急速に進行していた宗教改革という名の第三次教会大分裂²⁸と相俟って、キリスト教がヨーロッパの同一性を担保することにもはやなくなり、以降は敵の優れた戦術を取り入れる戦略・戦術の進化の過程が、16世紀以降戦乱の絶えなかったヨーロッパにおいて継続的に進行し、ヨーロッパというアイデン

ティティを保証する軍事的同一性²⁹ (=isomorphisme militaire) を構成していくことになる。

フランスの人文主義が破壊したもの

こうして、西ヨーロッパにおけるアイデンティティは、キリスト教という基盤を失いながらも、軍事的同一性に基づくアイデンティティを急速に構築していった。それと同時に、フランスの中央集権化が進み、フランス国家としてのアイデンティティも同時に生まれてきたのが、16世紀の前半である。この複雑に入り組んだ力学の中で醸成されてきたフランスというアイデンティティの出発点にいたのがラブレールであり、ラブレールの人文主義である。このアイデンティティの複雑さは、宗教がもはや絶対的に依拠できるものではない時代のものであり、すでに見た14世紀イタリア発祥の人文主義の16世紀における変容・進化を理解するのに不可欠な背景である。

ここで少し時代を遡って、先に述べたフランス・ルネサンスの開始時期の二つ目の考え方に基づいて1470年代に目を向けると、14世紀のペトラルカたちが始めた古代ローマの文献復興の動きは、15世紀には文化的な大きな潮流となり、とりわけ世紀中葉の印刷術の発明³⁰が拍車をかけ、1470年代にパリに導入されることで、知的運動が個人のネットワークを超えて、社会・国を超えた大規模な広まりを見せる契機となった。こうして人文主義が大きな知的ムーブメントとなる中で、1486年に、イタリアのユマニスト、ピコ・デラ・ミランドーラによる、「人間の尊厳について」が書かれる。このマニフェストは1504年の死語出版によって、イタリア戦争を契機としてフランスにも流入して一気に広まり、肉体としての人間をありのままに肯定することで、現実否定のキリスト教に対する思想的な一つの転換点となったものである。

« 人間以外のすべての生き物は、我々によってその本性を決められており、我々が決めた制約から超えて存在することはない。人間たるお前だけが唯一、あらゆる制約を超えて、この私がお前に返してやった自由意思に従って自らの本性を決めることができるのだ。私はお前をこの世界の中心に据えてやった。それはお前を囲むこ

の世のすべての物事をより見やすくしてやるためだ。私はお前を天上人にも地上人にもしなかったし、不老不死にも死すべき定めにもしなかった。だから、自らの欲するところと名誉に従い、自分自身を刻む彫刻家、芸術家として、好きなように自分を作れ³¹。

ピコ・デラ・ミランドーラは、この論文において、人間の自由意思こそ、神からゆだねられた、人間の尊さの源泉であると主張する。ラブレーがトマス・モアの『ユートピア』に倣って作ったテレームの僧院も、その唯一の規則は「欲することをなせ³²」とあるように、ルネサンスという文芸復興・近代の幕開けに、この人間の尊厳を高らかに謳った宣言はユマニストたちにとって大きな希望となり、中世キリスト教によるイデオロギー支配に対する「解放者」としての強い使命感と意思の根源となった。何故なら、この自由意思を拠り所とすることによって、福音書の神の言葉に対して個人の自由解釈を正当化し、聖書に対する教会の解釈以外を許さないカトリックの教義への反旗を翻す根拠とできるからである。

こうして古代ローマへの郷愁から出発したイタリア人文主義は、フランスにおいては人間の自由意思を中世のキリスト教支配からの解放の契機とする動きへと進化していくことになった。公会議という教会制度による聖書の解釈のみが許され、逆に個人の解釈の「自由意思」が否定された中世の解釈主義キリスト教に対して、ユマニストの代表格であるエラスムスの1516年のギリシア語訳、1523年のルフェーブル・デターブルのフランス語訳が出版され、教会権威の解釈を通さずに聖書、すなわち神の言葉を個人が自由に解釈できるようになったのである。「印刷術を「後見人」とする³³」人文主義が、カトリックによる共同体・民衆支配を終わらせる武器として、カトリックの存立基盤たる聖書そのものを印刷術という武器によって最大限に活用したのだ。

この進化したユマニスムは、当然カトリックとの対立を生み出す。フランスでユマニスム = humanisme の言葉が認められるのは実は17世紀になってからで、最初に用いられていたのはユマニスト = 人文主義者の語のみであったが、

この言葉の使い方は、否定的なものであった。1526年にはソルボンヌ神学部長として、ルネサンスの反動権力代表の筆頭に挙げられるノエル・ベダ（Noël Bédard）が上記のルフェーブル・デタープルやエラスムスとその一派をユマニストと呼んでおり³⁴、そこには、反キリスト、無神論者に対するカトリックからの非難³⁵の意味が込められていた。

人文主義の果たした役割は、古代文明の栄光の復興ではなく、人間のカトリックからの解放の戦いであった。さらに一步踏み込んでいえば、西ヨーロッパを支配した中世キリスト教秩序の破壊であった。ガルガンチュアがパンタグリユエルに宛てた手紙の中でラブレールが語った時代の空気は、この人文主義者たちの希望と明るさを表している。

「だがおまえも話に聞いてよく知っているだろうが、時代はまだ、現在のように人文学には適しても便利でもなく、わたしは、おまえのように多くの家庭教師を持っていなかった。時代はいまだ暗く、ゴート族の不幸な災厄が感じ取れた。やつらがすべての良き文芸を破壊してしまったからだ。しかし神の慈悲によって、今の我が世に光と尊厳が文芸に再び戻ってきた。その改善の程度は、この私が今の小学生のクラスに入ることも難しいくらいになってきたほどだ。それでも私は、かつては誇張なく最も優れた学者と言われていたというのに³⁶。」

ゴート族により蹂躪されたものはなんであったか。ここで言及されているのはキリスト教ではなく、古代ギリシア・ローマの自由学芸であり、それらを復興させることで人間をキリスト教の軛から解放して新たに「優れた学者」たちを生み出す基盤をつくるのがここで述べられている。それはJ. ミシュレがルネサンスという名前をこの時代につけた価値観である。中世を暗黒時代と捉え³⁷、16世紀前半を明るい解放と文芸の時代というイメージをつくったミシュレの歴史観は、このラブレールの人文主義の歴史観を反映している。

アイデンティティとしてのフランス語

この人文主義の進化形が、中世から近代への転換という急速な変容の時代に

果たした役割が人間のキリスト教からの解放の他にもう一つある。フランス語の顕揚である。西ヨーロッパがキリスト教以外の新たなアイデンティティを必要とし、中央集権国家が誕生していく中でそれぞれの国家もアイデンティティを必要とするようになった時代に、この人文主義の進化形が言語面でのフランスのアイデンティティ³⁸を培う役割を担っていく。

すでに見てきたように、北イタリアに侵攻したフランスは、イタリアの成熟したルネサンス文化に触れて、一気にその影響がフランスとその王宮に流入する。16世紀初頭のフランスと言え、日本でいうところの戦国時代の戦いに明け暮れた時代からようやく天下統一を成し遂げたばかりのところで、王侯貴族とはいえ戦士としての粗暴さが生活様式に染みついてところに、優雅なイタリア文化の影響は絶大であった³⁹。16世紀前半のフランスの政治・軍事・社会・文化、すべての領域でその後の近代フランスの原型に欠かせない要素を植え付けることになる。

このイタリアに対する当時のフランスのライバル意識・焦り・劣等感などは、負の出発点ではありながら、統一国家としてのフランスのアイデンティティの形成を促す要因の大きな一つとなっていることも否定できない。このイタリア文化、その源流にある古代ローマへの劣等感から、ラブレーを含めたフランスの人文主義者たちがフランスのアイデンティティ確立を言語に求めた。

それまで、西ヨーロッパの公用語としてラテン語が言語面でのアイデンティティを担保していたが、ローマ・カトリックの権威の失墜と中央集権国家の成立は、各国のアイデンティティの基盤として自国言語の整理を急いだ。100年戦争の時代（1339～1453）まで、オック語とオイユ語⁴⁰の二つで南北に分かれていたフランス⁴¹は、1491年のブルターニュの併合と統一国家の誕生の過程で、急速に言語の統一が進んでいたが、1539年のヴィレル・コトレ勅令で行政文書・公文書をラテン語に代わりフランス語で書くことが決定された⁴²。ラブレーが「ガルガンチュア（1534年）」、「パンタグリュエル（1532年）」を書いた直後である。

この辺りから、現代のフランス語に通じるフランス語が急速に生まれる時代⁴³

である。またその成立条件としての統一国家が確立され、新しい統一国家の新しい統一言語としてのフランス語がマグマのように湧き上がってきた時代であった。その時代に『ガルガンチュア』と『パンタグリュエル』を書いたラブレールは、語彙、表記、文法の面で新しい試みを採用し、フランス語の発展に大きく貢献している。ローマ数字の代わりにアラビア数字を文書（作品）中で用いたのもラブレールが最初であり、作品中に記号の自己増殖のように、洪水のようにあふれ出す様々なジャンルの語彙の列挙は、それがいまだフランス語になっていない時代にギリシア語学のフランスにおける第一人者としてのラブレールが積極的にギリシア語から移植したもので現在に至るものも多い⁴⁴。

ヴィレル・コトレの勅令の10年後の1549年には、ジョアキム・デュ・ベレー⁴⁵の『フランス語の擁護と顕揚⁴⁶』が出版されることになる。プレイアード派の宣言として、ラテン語と同じレベルに格調高い詩をフランス語で書くことを宣言しているこの本文自体がイタリアのラテン詩の剽窃であることが、フランスのイタリアに対する文化的劣等感の深さを物語ってはいるが、デュ・ベレー兄弟と近かったラブレールが、その息子の著作につながるフランス語顕揚運動に意識的であったことは必然であり、作品中のあらゆる言語的実験もその流れで読みとるべきである。

加えて、V.-L. ソーニエが指摘するように⁴⁷、16世紀の後半にはフランス語のラテン語化に対抗するためにギリシア語が美化され、イタリア宮廷文化の影響をイタリアかぶれと蔑む動きがでてくるように、フランス語を古典ギリシア・ローマの言葉のレベルにまで高めることをラブレールたちはみずからの使命と感じていたのであろう。

しかしながらこのフランス・ユマニスト運動の帰結は、次の17世紀には失敗が明らかになる。L.-F. セリーヌが指摘するように⁴⁸、ラブレールがけん引した豊かな語彙のフランス語生成の動きは、古代ローマのセネカの弁論術をモデルとした簡潔で論理明快なフランス語を目指す世紀後半のJ. アミヨらが主導する動きの中に収斂していき、次の17世紀の明晰・簡潔を美とする古典主義文学の中に葬られていく。

古代ローマを範とし、反フランスの動機を持つ元祖イタリアの人文主義に対して、ラブレーらフランスのユマニスト達がギリシア古典に比重を置いたのは偶然ではないが、同じ古典文明の中でもよりフランスに直接の流れをもつ古代ローマのラテン語文化の影響には抗えず、イタリア戦争を契機とするイタリア・クワトロチェントの流入の影響はあまりに大きかったのである。

結論

P. ジュルダが A. ルフランに倣って指摘するルネサンスの特徴としての、「人類の知性の脱宗教化、及びキリスト教的理想の減退を前提とする人間の解放⁴⁹」は、まさにユマニストたちによって思想的に準備されたといえるのであり、ラブレーはフランスにおけるその第一人者であった。

本稿前半で見たように、ラブレーの作品の属性であり研究の主要なテーマともなっているグロテスク・リアリズム、記号的実験は、新しい創造を前提とする既成秩序の破壊という文化的役割を担っていた。この役割は、現代においても読者に対してその機能を失っていないが故に、ラブレーの作品が現代まで読み継がれている所以となっているともいえる。

ラブレーの人文主義も、「人間の解放」という大義名分の下でのキリスト教秩序の破壊という役割を担っていた。総じて、ラブレーの文学は、破壊をその本質としているとっていいだろう。ただし人文主義に関しては、その歴史的経緯を見ると、当時の複雑な利害関係の対立の中で迷走・孤立の道を歩むことになった。キリスト教は分断がいよいよ深刻化し、西ヨーロッパの新たなアイデンティティも戦乱の世紀において必然的に軍事的同一性が担保するようになる中で、ラブレーの人文主義はカトリックとプロテスタントの対立だけではなく、カトリックの中の王権派、ソルボンヌ神学部、教皇派の対立が生まれる混沌状態の中で、その役割を見出すことが難しくなっていったのである。

本来であれば人文主義者はプロテスタントとの連合が必然に思えるが、エラスムス、ラブレー達はカルヴァンの急進性を否定し袂を分かつことになる。神

学部禁書・弾圧を逃れるためにも、カトリック王権派として王の庇護を求めることになる。この必然が反映されたのが、ラブレの作風の大きな変化である。笑いとスカトロロジーの世間のイメージをもつ第一・第二の書に比して第三・第四の書は笑いが影を潜め、人文主義の圧倒的な古典知識の洪水で埋められた晦渋さは、古代ギリシア・ローマの高い素養を要求するために、現代一般読者からは受け入れられないであろう。

本稿の冒頭で提起したラブレ研究の飽和と今後の展望について考える際に、そもそも現代にも読み継がれる古典という前提でのラブレ研究であるが、この人文主義の難解さは、時代が新しくなるにつれてますます新しい読者を拒絶するような懸念もはらんでいる。

新時代における読みなおし

ラブレ研究の概観のところで見たとおり、こうした閉塞状況の中でフランス、イギリス、アメリカ、日本でも過去の研究の集大成のような作業に入っている段階であるが、しかしそれは同時に、作品が内包するこれらの普遍的価値を、新たな時代にあわせて読み換えていく作業が必要になってきたともいえる。文学作品の提示する意味は、作品が世界と切り離されて独立したテキストとして持つものではない。それは異なる時代・文化・社会を背景とする読者が作品を「読む行為」を通じて構築するものであり⁵⁰、個々の読む行為に発生する意味は、時代・社会・個人によって異なるのである。

現在は、21世紀もすでに四半世紀が経過し、19世紀末、西洋帝国主義の世界制覇と同時に始まった近代学問としての文学研究の時代はすでに過ぎた。近代の後、現代、ポスト・モダンという言葉で言い表された時代も過ぎ去り、世界の変化に呼称がしっかり対応できていない状況ではあるが、AIの時代であり、デジタルの時代であり、文学作品を「読む行為」そのものが変容していく時代に、ラブレ研究が迎えている閉塞状況というのは、文学研究という制度自体が、これまでの限られた120年間という近代的価値で読み取ってきた意味の書き換え作業を要求されるようになってきたのかもしれない。

そこで改めてラブレの今後の研究の可能性について考えることは、ラブレのグロテスク・リアリズム、記号増殖、人文主義という三つの破壊的属性を新たな時代で読み直す作業となるであろう。その際に、とりわけ日本の研究においてラブレの人文主義に関して留意しなければならない課題がある。この人文主義が、その難解さで現代読者を拒絶する懸念に対して、人文主義の意義をどのように伝えるかが重要になってくるのであるが、日本では、ユマニズムと日本語のヒューマニズムの混同が起きている。人文主義者とは⁵¹、現代のヒューマニズムという語に引きずられる形でイメージされる博愛主義的人道主義のようなものではない。すでに見てきたように、第一義的に破壊者である。しかし第一次大戦、第二次大戦という二つの世界大戦がもたらした悲劇は、「人道主義」の意味のヒューマニズムを近代社会に強く醸成する契機となっていた。M. ハイデッガーはヒューマニズムについて「人間が人間的なものであるようにと […] 思いを致し、気遣うこと⁵²」としている。ラブレ研究の第一人者たる渡辺一夫は当初より「わかったようなわからないような、ほんやりと⁵³」した博愛主義的人道主義と人文主義の混同に警鐘を発していたが、ルネサンスの知的ムーヴメントとしての人文主義は、その名前の類似から人道主義のヒューマニズムに飲み込まれてしまった感がある。ラブレの作品に初めて触れる読者が、先入観なく読むことは難しいが、この人道主義の先入観で読まれることは、研究者が一番望まないことである。

すでに述べたように、ラブレの人文主義は、グロテスク・リアリズム、記号増殖と相俟って、文学の領域で圧倒的な創造と破壊のモーメントを展開するのであり、この人文主義を博愛主義的人道主義と読み違えてラブレの作品に触れると、その創造・破壊の文学体験を自ら拒否することになりかねない。

従って日本では、研究の入り口のところでラブレのユマニズムから、近代の垢のついたヒューマニズムを洗い落としてやることが肝要になる。加えて、今後のラブレ研究が、仮に新たな時代における新たな意味の読み直しを要求するならば、それにあわせた新たな研究者が育つ土壌を可能な限り簡潔にすることが我々近代の文学研究の徒に残された道であろう。今後の新しい研究者が、

120年の先行研究を読む途中で一生を終えることのないように、それと同時に、その重荷を避けてラブレを研究対象から回避するような現状が繰り返されないようにしなければならない。

- 1 https://www.lemonde.fr/culture/article/2024/09/17/le-poete-joachim-du-bellay-identifie-dans-un-cercueil-retrouve-a-notre-dame-de-paris_6321666_3246.html
- 2 この後の議論で展開していくように、ラブレ研究の概観を見ていくと、研究が始まって半世紀を過ぎたあたりから、ラブレ研究の飽和が始まり、同時代のその他の作家の作品群に目が向けられるようになっていき、1世紀近くなる辺りから、ラブレ研究の集大成の動きも出てくるようになり、同時進行的にその他の一般には無名の作家、思想家などの研究がより活発になった時期が見られた。筆者のように1990年代に16世紀研究に身を投じた研究者たちの間では、いかにまだ研究されていない、それと同時に価値のある作家・作品を手掛けるかは、その後のキャリア・生活に直結するものとして認識されていた。その辺りからは、学会発表などで若手の研究者がいかにみずからの選んだ無名作家・思想家が重要かを主張する、あたかも香具師の口上のような傾向が出てきたことは否定できないどころか、フランス文学界の今後を考える際に深刻に受け止めるべき事実であろう。
- 3 フンボルト理念を出発点として現代に至る大学の歴史については、以下参照。潮木守一『フンボルト理念の終焉？現代大学の新次元』、東信堂、2008年、広島大学大学院総合科学研究科（編）『世界の高等教育の改革と教養教育：フンボルトの悪夢』丸善出版、2016年。
- 4 フランス大学制度に関しては、以下参照。向井一夫「フランス高等教育の変遷 大学と学部を中心に」椋山女学園大学生生活科学部 生活の科学 8号1986年、pp. 77-93; 大場淳「フランスにおける大学教育改革」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）第53号、2005年3月、pp. 341-350。
- 5 実在も疑う異論が多く、ここではあえて作者にホメロスの名前は出さない。口承での流布が紀元前8世紀、口承のテキストが固定されたのが紀元前6世紀とされている。（cf.）Ph. Brunet, *La naissance de la littérature dans la Grèce ancienne*, Paris, Livre de Poche ; P. Carrier, *Homère*, Paris, Fayard, 1999.
- 6 *Études rabelaisiennes* は、1903年の創刊以来、現在まで62巻が継続して出版され続けている。最新版は、S.Rawles, *A Census of Rabelais Copies (1532-1626) with some Additions and Corrections to the New Rabelais Bibliography*, *Études rabelaisiennes*, LXII, Genève, Droz, 2024.
- 7 F. Rabelais, *l'Oeuvre*, (éd. par) A. Lefranc, 5 volumes, Paris, Honoré Champion, 1913-1931.
- 8 M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et*

- sous la Renaissance*, 1940, (trad. de russe par) A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993.
- 9 M.-A. Screech, *Rabelais*, Londres, 1979, trad. par M.-A. de Kisch, Paris, Gallimard, 1992 ; *Rabelais et le mariage : Religion, morale et philosophie du rire*, traduit en français par Ann Bridge, *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992 ; *The Rabelaisian Marriage*, London, Cambridge University Press, 1958 ; *A New Rabelais Bibliography*, Genève, Droz, 1987.
- 10 F. Rigolot, *Les Langages de Rabelais*, *Etudes Rabelaisiennes*, t. X, Genève, Droz, 1972 ; « Cratylisme et Pantagruélisme : Rabelais et le statut du signe », dans *Etudes Rabelaisiennes*, t. XIII, Genève, Droz, 1976, pp. 115-132 ; M. Jeanneret, *Le défi des signes : Rabelais et la crise de l'interprétation à la Renaissance*, Orléans, Paradigme, 1994 ; J. Paris, *Rabelais au futur*, Paris, Etidions du Seuil, 1970 ; J. Parkin, « Comic Modality in Rabelais : Baisecul, Humevesne, Thaumaste », *Etudes Rabelaisiennes*, t. XVIII, 1985, pp. 57-82.
- 11 70年代の当時では、G.-A. Pérouse が名付けた「雑多なジャンル = genre bigarré」と一括りの扱いをされていた。G.-A. Pérouse, *Nouvelles françaises du XVI^e siècle. Images de la vie du temps*, Genève, Droz, 1977; 《De Montaigne à Boccace et de Boccace à Montaigne : Contribution à l'étude de la naissance de l'essai », dans *La nouvelle française à la Renaissance*, éd. par L. Sozzi, Genève, Slatkine, 1981, pp. 13-40.
- 12 (Cf.), R. Cooper, « Outline bibliography of works on chivalry published in France before 1600 » dans *Chivalry in the Renaissance*, éd. par Sydney Anglo, Woodbridge, Boydell press, 1990 ; M. Rothstein, « Le genre du roman à la Renaissance » dans *Le Roman chevaleresque tardif, Etudes françaises*, Montréal, Presses de l'Université de Montréal, vol. 32, n° 1, 1996 ; P. Mounier, *Le roman humaniste : un genre novateur français 1532-1564*, Paris, Honoré Champion, 2007 ; *D'une fantastique bigarrure : Le Texte composite à la Renaissance*, éd. J.-R. Fanlo, Paris, Champion, 2000
- 13 V.-L. Saulnier, préface de *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, Genève, Paris, 1981 ; *Le Roman français au XVI^e siècle : ou le renouveau d'un genre dans le contexte européen*, M. Clément et P. Mounier (sous la dir. de), Strasbourg, Presses Universitaires de Strasbourg ; P. Mounier, *Le roman humaniste : un genre novateur français 1532-1564*, Paris, Champion Editeur, 2007 ; J. Dauphiné et B. Périgot (éd. par), *Conteurs et Romanciers de la Renaissance : Mélanges offerts à G.-A. Pérouse*, Paris, Honoré Champion, 1997.
- 14 F. Rabelais, *l'œuvre complète*, éd. par M. Huchon, Paris, Gallimard, collection « Pléiade », 1994. 2022年には、ラブレー研究の重鎮たる G. ドゥメルソンの逝去(2020年)を機に新たなラブレーの全集が出版されたが、ユション版に比べて註の数は大幅に減らされ、M. ユションの校訂版に代わるものとはなっていない。(cf.), R.

Menini (éd. par), *Tout Rabelais*, Paris, Bouquins, 2022. この「ラブレールの全て」というタイトルが示すように、ラブレールの全てをなるべく多くの読者に、という趣旨の出版であり、普通のラブレール作品の出版には含まれない小作品も全て含み、現代語訳も付記されているが、註の量・詳細さは研究者向けではなく、一般向けの範囲となっている。

- 15 M. Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011.
- 16 T. W. Reeser (éd. par), *Approaches to Teaching the Works of François Rabelais*, Modern Language Association of America, 2011.
- 17 J. O'Brien, *The Cambridge Companion to Rabelais*, Cambridge University Press, 2010.
- 18 M. スクリーチ著、平野隆文 訳、『ラブレール 笑いと叡智のルネサンス』, *Rabelais, op.cit.*, 1979, 白水社, 2009年。日本では、2009年の M. スクリーチのラブレール概説書の翻訳が刊行されたが、スクリーチの概説書自体が1979年のものである。これは裏を返せば、スクリーチの著作が概説書として十分であり、それ以降の半世紀にラブレールの読み方に大きな変化はないということを意味する。また、ラブレールの作品の翻訳としては、渡辺一夫の和訳（岩波書店 1973年）が絶対的なものとしてあり続けたが、宮下志朗が2005年から2012年にかけて、全五巻の新訳を刊行する。フランソワ・ラブレール『ガルガンチュアとパンタグリュエル1～5』, 筑摩書房, 2005年～2012年。渡辺一夫の訳以外に日本語へ翻訳は不可能と言われるほどの高い評価を得ていた渡辺訳も、日本語の古さが徐々に難解さにつながり、現代読者にとってラブレールへの敷居がやや高くなってきていたのは事実である。宮下訳では平易な新しい日本語での翻訳に努めているが、二つの和訳が共存していくか、どちらかが淘汰されるかは、今後に委ねられる。
- 19 以下、すべて引用テキストの翻訳は筆者による。F. Rabelais, *Gargantua*, dans *l'œuvre complète*, éd. par M. Huchon, *op.cit.*, Ch. 11, pp. 33-34 : « Gargantua, depuis les troys jusques à cinq ans, feut nourry et institué en toute discipline convenente, par le commandement de son père, et celluy temps passa comme les petitz enfans du pays, c'est assavoir : à boyre, manger et dormir ; à manger, dormir et boyre ; à dormir, boyre et manger. Toujsours de vaultroit par les fanges, se mascaroyt le nez, se chauffourraoit le visaige, aculoyt ses souliers, baisloit souvent aux mousches, et couroit volentiers après les parpaillons, desquelz son père tenoit l'empire. Il pissoit sus ses souliers, il choyoit en sa chemise, il se mouschoyt à ses manches, il mourvoit dedans sa soupe et patroilloit par tout lieux, et beuvoit en sa pantoufle, et se frottoit ordinairement le ventre d'un panier.
- 20 無記名の大文字の身体に関しては、拙論参照。『パンタグリュエルにおける身振りのエピソードの解釈』, 日本大学法学部桜文論叢106号, 2022年, pp.1-21.
- 21 M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et sous la Renaissance*, trad. de russe par A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993.

- 22 イタリア人文主義に関しては、以下参照。池上俊一編、『原典・イタリア・ルネサンス人文主義』名古屋大学出版会、2009年；E. Garin, *L'humanisme italien*, (trad. en français) Paris, Albin Michel, 1947, 2005。
- 23 池上俊一編、『原典・イタリア・ルネサンス人文主義』, *op.cit.*, pp. 36-37.
- 24 A. Jouanna, Ph. Hamon (éd. par), *La France de la Renaissance*, Paris, Robert Laffont, 2001, p. 18.
- 25 ヨーロッパのアイデンティティーの生成過程に関しては、以下参照。J. Hale, *La civilisation de l'Europe à la Renaissance*, 1993, trad. Par R. Guyonnet, Perrin, Paris, 1998.
- 26 フランス・ルネサンスの歴史は、エポック・メイキングな出来事が重なるケースが散見される。1453年と1543年は、それぞれに極めて象徴的な出来事が起きている。コンスタンティノーブルの陥落と東ローマ帝国の滅亡が、100年戦争の終結と同じ1453年に起きたことは、西ヨーロッパがその後500年つづく西洋文明の覇権の出発点として象徴的なものである。また1543年は、コペルニクスの『天球の回転について』とヴェサリウスの『ファブリカ』が出版された年であり、天動説と解剖学という、ルネサンスのエピステーメにおける科学の根幹にあるマクロコスモスとしての宇宙とミクロコスモスとしての人体に関する近代科学が同時に出発した象徴的な年である。
- 27 A. Jouanna, *La France du XVI^e siècle : 1483-1598*, Paris, PUF, 2006, p. 4.
- 28 二つのシスマ（＝断裂）と呼ばれるカトリックとギリシア正教の決別、アヴィニョンへのローマ教皇の捕囚によるカトリック権威の内紛に対して、このカトリックからのプロテスタントの分離を改革と呼ぶのは、ヨーロッパの同一性・アイデンティティーを保証するキリスト教がこれ以上毀損されることを忌避する意図の表れとも言えるだろう。
- 29 拙論参照。『フランソワ・ラブレーの作品に見る近代軍事革命』, 日本大学法学部紀要桜文論叢101号, 2020年, pp. 1-23.
- 30 書物の歴史に関しては、以下参照。L. Febvre, H-J Martin *L'apparition du livre*, ; A. Parent, *Les Métiers du livre à Paris*, 1974 ; H.-J. Martin, *L'apparition du livre*, Paris, Albin-Michel, 1958, 1999 ; A. ベティグリー, 『印刷という革命・ルネサンスの本と日常生活』, 2010年, 桑木野幸司 訳, 白水社, 2017年 ; J. ヘリッシュ, 『メディアの歴史・ビッグバンからインターネットまで』, 2011年, 川島健太郎, 他 訳, 法政大学出版局, 2017年 ; 大黒俊二 『声と文字』, 岩波書店, 2008年。
- 31 Pic de la Mirandole, le Discours de la dignité de l'homme, traduction de A.-M. Schmidt, cité par Jean-Yves Boriaud, *La littérature française du XVI^e siècle*, Paris, Armand Colin, 1995, p. 33 : « Toutes les autres créatures ont une nature définie contenue entre les lois par nous prescrites ; toi seul, sauf de toute entrave, suivant ton libre arbitre auquel je t'ai remis, tu te fixeras ta nature. Je t'ai placé au centre de l'univers afin que tu regardes avec d'autant plus d'aisance à l'entour de toi tout ce qui est au monde. Je ne t'ai fait ni céleste ni terrestre, ni mortel ni

immortel ; d'après ton vouloir et pour ton propre honneur, modeleur et sculpteur de toi-même, imprime-toi la forme que tu préfères. »

- 32 Rabelais, *Gargantua*, *op.cit.*, Ch. LVII, p. 149 : « *Fay ce que voudras* ».
- 33 宮下志朗, 『フランス・ルネサンス文学集 1』, 白水社, 2015年, 「解説」 pp. 500-501.
- 34 (Cf.) E.-L. Eisenstein, *La révolution de l'imprimé à l'aube de l'Europe moderne*, Paris, La Découverte, 1979, 1991 ; R. Chartier, H.-J. Martin, *Histoire de l'édition française*, t. I, *Le Livre conquérant, du Moyen Age au milieu du XVIIe siècle*, Paris, Fayard, 1989.
- 35 16世紀において, 無神論は存在しない。Athée = 無神論者という非難は, 神を信じていない者への非難ではなく, 思想的に最も糾弾すべき相手に用いられる最上級の非難の言葉以上の意味を持たない。(cf.) L. Fèbre, *Le problème de l'incroyance au 16^e siècle*, Paris, Albin-Michel, 1942, 2003.
- 36 Rabelais, *Pantagruel*, *op.cit.*, ch. 8, p. 243 : « toutesfoys comme tu peulx bien entendre, le temps n'estoit tant idoine ne commode es lettres comme est de present, et n'avoys copie de telz precepteurs comme tu as eu. temps estoit encores tenebreux et sentant l'infelicite et calamité des Gothz, qui avoient mis à destruction toute bonne literature. Mais par la bonté divine, la lumière et dignité a esté de mon eage rendue es lettres et y voy tel amendement que de present à difficulté seroys je receu en la premiere classe des petitz grimaulx, qui en mon eage virile estoys (non à tord) réputé le plus sçavant dudict siecle. »
- 37 J. ミシュレ, 『フランス史 VII・ルネサンス』, 1855年, 桐村泰次 訳, 論創社, 2019年。
- 38 フランスのアイデンティティーについては以下参照。F. ブローデル, 『フランスのアイデンティティー』, 1986年, 桐村泰次 訳, 論創社, 2015年。R. Muchembled, *L'invention de la France moderne : monarchie, cultures et société (1500-1660)*, Paris, Armand Colin, 2002.
- 39 フランスにおけるイタリア・ルネサンスの影響に関しては, 以下参照 : J. Balsamo, *L'Italie française. Italianisme et anti-italianisme en France à la fin du XVIe siècle*, thèse Paris IV, 1988, - éd. par, *Passer les Monts ; Français en Italie-l'Italie en France (1494-1525)*, Xe colloque de la Société française d'étude du Seizième Siècle, Paris, Honoré Champion, 1998 ; C. Billot, « Les Italiens naturalisés français sous le règne de François Ier (1514-1517) », *Strutture familiari, epidemie migrazioni nell'Italia medievale*, p.477-492 ; I. Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, Paris, Albin Michel, 1986 ; J.-F. Dubost, *La France italienne*, Paris, Aubier, 1997 ; E. Picot, *les Italiens en France au XVIe siècle*, Rome, Vecchiarelli, 1995.
- 40 オック語とオイユ語の歴史的・地理的關係に関して, 以下参照。F. ブローデル, 『フランスのアイデンティティー』, *op.cit.*, pp. 72-79.
- 41 F. Cornillat, A. Berthelot, *Littérature Moyen Age / XVIème siècle*, Paris, Nathan, 2007, p. 3.

- 42 2023年10月30日に、パリ北東のヴィレル・コトレ城において、フランソワ・マクロン大統領の肝いりで作られた国際フランス語博物館が開館した。1539年のヴィレル・コトレ勅令をフランス語の原点と捉える意識が現代フランスにも脈々と受け継がれている証である。 <https://www.cite-langue-francaise.fr/>
- 43 16世紀のフランス語の歴史に関しては、以下参照。M. Huchon, *Histoire de la langue française*, Paris, Le livre de poche, 2011.
- 44 ラブレールの言語面での影響に関しては、以下参照。F. Rigolot, *Les Langages de Rabelais*, Genève, Droz, 1972 ; F. Giaccone (éd. par), *La langue et les langages dans l'œuvre de François Rabelais*, Genève, Droz, 2021.
- 45 本稿の冒頭で紹介した通り、つい先日遺体がパリのノートルダム寺院で発見されたが、プレイヤード派の一人として、最初の組織的なフランス語文学運動を担ったデュ・ベレーは、ラブレールの庇護者であったジャン・デュ・ベレーの兄、ギヨームの息子である。
- 46 デュ・ベレーに関しては、以下参照。Bruno Roger-Vasselín, *Du Bellay, une révolution poétique ? La Deffence, et illustration de la langue françoise & l'Olive (1549-1550)*, Paris, PUF, 2007. 邦訳に関しては、以下参照。ジョアシャン・デュ・ベレー, 加藤美雄 訳『フランス語の擁護と顯揚』白水社, 1943年。この有名な作品自体が、イタリアの作品の模倣であることは実に皮肉なことであるが、逆に言えば、当時においては作品の模倣・剽窃ということにためらいがない時代であり、著作権という、個人を前提とする概念が存在しなかったことの証でもある。
- 47 V.-L. ソーニエ『十六世紀フランス文学』二宮敬 訳, 白水社, pp. 95-99.
- 48 L.-F. Céline, *Rabelais, il a Raté son Coup*, Librairie Axel Benadi, Broy, 1994.
- 49 P. Jourda, *Marguerite d'Angoumème : Duchesse d'Alençon, Reine de Navarre (1492-1549) ; Etude biographique et littéraire*, Paris, Honoré Champion, 1930, rééd., Genève, Slatkine Reprints, 1978, I, p. XII.
- 50 拙論参照「小説における身体の在り処」日本大学法学部紀要桜文論叢103号, 2021年, pp.205-221。
- 51 人文主義についてはフランス・ルネサンスを語るのと同義であり参考文献も同様に多くあり、以下の参照はそのわずか一部である。A. グラフトン, 『テキストの擁護者たち・近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』, 1991年, ヒロ・ヒライ, 福西亮輔 訳, 勁草書房, 2017年 ; A. Bidar, *Histoire de l'humanisme en Occident*, Malakoff, Dunod, 2021 ; G. Gadoffre, *La Révolution culturelle dans la France des humanistes*, Genève, Droz, 1997 ; E. Garin, *L'humanisme italien*, Paris, Albin Michel, 1947, 2005 ; N. Journet (sous la dir. de), *Humanisme : Le destin d'une grande idée*, Auxerre, Sciences Humaines Editions, 2024.
- 52 M. ハイデッガー『「ヒューマニズム」について』, 渡邊二郎訳, 筑摩書房, 1997, 2018年, p.30.
- 53 渡辺一夫『ヒューマニズム考：人間であること』講談社, 1973年, 2023年, p. 29.